

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520222

研究課題名(和文)後期萬葉長歌の和歌史的研究

研究課題名(英文)a historical study of long poetry in the late Manyoshu

研究代表者

奥村 和美 (OKUMURA, KAZUMI)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：80329903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『萬葉集』の第三期・第四期いわゆる平城京遷都[710]以降の後期萬葉の長歌、特に大伴家持の長歌を主たる対象とする。大伴家持の長歌表現について、大伴池主歌と比較しつつ、先行歌人の中でとくに山部赤人に学んだ作品のあることを明らかにした。また、中国文学からその方法や形式を受容していった過程を分析し、唐代小説『遊仙窟』や初学書『千字文』が利用された一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：A historical study of long poetry in the late Manyo-shu.

This study is directed to the third phase and the fourth phase of Manyo-syu, in particular a long poetry of Ootomo Yakamochi. This study revealed that they have learned to the representation of Yamabe Akahito by comparing with Ootomo Ikenushi. And this study analyzed the process that received the form and method of Chinese literature, and revealed that the novel Yusenkutu and the textbook Senjimon was utilized.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 日本文学

キーワード：萬葉集 大伴家持 長歌

1. 研究開始当初の背景

『萬葉集』において長歌は宮廷儀礼を主たる場とするハレの歌としてまず出発した。長歌は、初期萬葉(～壬申の乱[672]まで)の揺籃期を経て、萬葉第二期(～平城京遷都[710]まで)の柿本人麻呂において定型としての完成と叙情詩としての達成を迎えたとするのが今日の一般的な理解である。その後、第三期(～天平5年[733]まで)・第四期(～天平宝字3年[759]まで)と長歌は作られ続けたが徐々に減少し、平安朝以降はほとんど詠まれなくなる。その第四期にあって、46首という比較的多くの長歌作品を残したのが大伴家持である。

萬葉和歌史の最後尾に位置して、家持の長歌はもっぱら終末の相において捉えられている。作品としては否定的評価を受けることが多く、柿本人麻呂・山部赤人・笠金村・高橋虫麻呂・山上憶良らの長歌を懸命に模倣するものの、それらに比して劣るというのが共通した見解である。

しかしながら、家持が、長歌において新しい試みをいくつかなしていることも事実である。たとえば、中国詩文の「賦」の形式に意識的に擬すことや、花鳥のような景物を主題としてとりあげるいわゆる「花鳥諷詠長歌」の制作、或いは中国詩文を踏まえた説話的設定のもとに虚構性の強い作品をなすこと、また或いは長歌末尾の終結法として既存の短歌を利用することなどである。それらの試みの中で特に注目すべきは、中国詩文の受容であろう。中国詩文から語彙を摂取するだけでなく、「賦」や「詠物」の表現方法を摂取することは、長歌の内実そのものを変質させる契機となったと思われる。そのような長歌の変容という現象について、結果に立って印象的に評価を述べて終わるのではなく、通時的な視点に立って変質する過程を跡付け論理を与えること、就中そこで家持長歌がもつ画期的意義を明らかにすることが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、『萬葉集』の第三期・第四期いわゆる平城京遷都[710]以降の後期萬葉の長歌、特に大伴家持の長歌を主たる対象とする。大伴家持の作品研究は、いまなお短歌中心の傾向があるが、あえて長歌を中心に据え、そこに見られる長歌表現の変容について、人麻呂や赤人・金村・虫麻呂・憶良らの先行歌に学ぶ一方、中国文学からその方法や形式を受容していった過程を分析し、平安朝和歌をも視野に入れつつ、和歌史における後期萬葉長歌の意義を考察する。

3. 研究の方法

これまでの長歌の通時的な研究では、家持長

歌の特質は彼の個人的な力量の問題として捉えられる傾向にあった。しかし、家持が第四期においてひとり意欲的に新しい長歌表現の開拓に取り組んでいることを考えたとき、むしろ家持において長歌という文学形式の最終的な問題の種々相が集約的に現れていることが推測される。したがって、研究期間内では、大伴家持の長歌についての研究を中心とする。家持の作歌は、一般に、越中赴任以前(天平18年[746]以前)・越中国守時代(～天平勝宝3年[751])・帰京後(～天平宝字3年[759])の三期に分けられる。家持の創作意識の変遷をたどる上では、年次を追って順次検討していくのが良いけれども、家持にとってもっとも長歌制作の充実した越中国守時代の作品からとりかかるとし、必要に応じて適宜、越中赴任以前或いは帰京後の作品に目をむけることにしたい。特に下記については、越中国守時代の作品でなければ検討することができないという理由もある。

具体的には以下からのアプローチをとる。

類歌類句を考察することによって、家持が、長歌詠作の場が失われつつある中で独自に先行作品に学び、長歌を継続的に或いは集中的に詠む過程を明らかにする。

中国詩文からの表現の摂取を考察することによって、家持長歌の方法的特徴とそれが長歌という形式面に与えた影響を明らかにする。

同時代の作品、とくに大伴池主の長歌と比較することによって、家持長歌の表現の特質を探り、家持長歌を相対化する視点を得る。

『古今集』長歌との差異と共通性を検討することによって、後期萬葉長歌と平安朝長歌との連続面と断絶面を見定める。

4. 研究成果

23年度の成果

これまで越中赴任期間の家持の長歌作品については、「山柿」を誰に比定するかということを中心に、憶良と人麻呂からの摂取について論じられることが多かった。

しかし論文及び図書によって、家持の「立山賦」(巻17・4000～4002)の詳細な検討を通して、山部赤人の歌からも意欲的に摂取し、新しい表現世界を切り拓こうとしていたことが明らかになった。とりわけ、本年度の成果が意義をもつのは、大伴池主が家持のそのような試みをよく理解し、「敬和立山賦」(巻17・4003～4005)において、家持に共鳴し或いは張合うようにして赤人歌からの摂取を行っていたことを、それぞれの類句に即し

て明らかにしたことにある。家持と池主の歌による交流の研究は、従来、家持歌の分析に偏りがちで、池主歌の分析は手薄であったが、本研究によって池主歌の分析を通して家持歌に新たな光をあてることが示されたと言える。

また、家持が「立山賦」において、雪山という大和ではあまり取り上げられない素材を詠む際に、中国詩文の表現方法を巧みに応用したことも明らかにした。そこでもまた、池主が家持のそのような方法をよく理解し、同様の方法で密接に応えている。池主の応え方を分析することを通して、家持の最もよく意図したところとその新しさを浮かび上がらせることに本研究は成功した。

24年度の成果

家持長歌を含む後期萬葉の和歌を中心に、中国文学との比較的地から研究を進めた。後期萬葉の和歌には、漢語を翻訳して産み出された翻訳語を用いることが指摘されてきた。それを承けて、論文によって、正倉院文書を通して、上代の官人達が日常使用の漢語をもとに作り出した翻訳語および翻訳的表現の幾つかを新たに指摘し、家持長歌の表現にもそれらが利用されていることを明らかにした。

また、上代知識人の漢字についての教養基盤をなす初学書『千字文』を視野に入れ、論文において、家持長歌を含む後期萬葉和歌の文字表現についての分析を行った。近時、習書木簡等の発見により、その初学書としての重要性に関心が集まっているが、萬葉和歌における受容の考察は、それほど進展していなかった。本研究は、『千字文』の書としての性格を考慮し、字形や字体などの文字のかたちにまで即した検討を行うことによって、家持をはじめとする官人達の文字選択の一端を明らかにしただけではなく、萬葉集の本文研究にもつなげる成果を挙げたことに大きな意義を存する。

25年度の成果

前年度に引き続き、初学書『千字文』からの受容のあり方を字形・字体や発想・表現などの種々の角度から考察した。論文においては、中国詩文に基づいて和歌表現をなす際、詠み手はいちいち原典にあたるのではなく、『千字文』を注とともに利用しており、その点で『千字文』は佳句や故事を圧縮要約して収載した簡便な書として、類書的な利用をされていることを明らかにした。

もう一つには、すでに家持との強い関わりが指摘されている、唐代小説『遊仙窟』からの受容について、発表において検討し直した。とくに『遊仙窟』じたいのもつ表現の類型性・通俗性という観点から、中国詩文における『遊仙窟』の位置づけを見直し、そこから、上代日本の和歌の詠作や散文の述作において、『遊仙窟』が修辞表現の教科書とし

て利用されていることを明らかにした。本年度は、『千字文』と『遊仙窟』という一見性格の全く異なる二つの漢籍からの受容を中心に考察を試みたが、それらを通して、家持を含む上代びとの教養世界の広がりが見明らかになったと同時に、中国詩文の精髓を簡便かつ的確に把握しそして表現に応用するための実用書として、両書が盛んに利用され、家持長歌の表現もその流れを承けるものであることを確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

奥村和美、出典としての『千字文』 『萬葉集』の歌と文章、萬葉、査読有、第二百十七号、2014年、21-32頁

奥村和美、『千字文』の受容 『萬葉集』を中心として、美夫君志、査読有、第八十六号、2013年、1-12頁

奥村和美、萬葉後期の翻訳語 正倉院文書を通して、叙説(奈良女子大学文学部日本アジア言語文化学会)、査読有、第四十号、2013年、17-32頁

奥村和美、『萬葉集』に詠まれた古都、都城制研究、査読有、第6巻、2012年、111-120頁

[学会発表](計6件)

奥村和美、萬葉集の中の神話、奈良女子大学文学部なら学プロジェクト(なら学東京講座)、2014・2・11、東京日本橋奈良まほらば館

奥村和美、文字の異なり、意味の異なり 『千字文』の利用、日本女子大学学術交流研究企画、2013・3・15、日本女子大学

奥村和美、『遊仙窟』の注釈と受容 上代文学 萬葉集、奈良女子大学古代学学術研究センター主催若手研究者支援プログラム、2013・8・25、奈良女子大学

奥村和美、仙女のおもかげ 萬葉集と遊仙窟、奈良女子大学文学部公開講座、2012・7・15、奈良女子大学

奥村和美、『千字文』の受容、美夫君志会例会、2012・3・21、中京大学

奥村和美、大伴家持の歌と日付、奈良女子大学文学部公開講座、2011・7・16、奈良女子大学

[図書](計2件)

奥村和美、古代都城・都市をめぐる環境論(平成23~25年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 研究代表者:館野和己奈良女子大学教授)、2014年、共著、225-234頁

奥村和美、塙書房、萬葉集研究 第三十二集、2011年、共著(本書のうち、家持の「立山賦」と池主の「敬和」について、を執筆)、

163-197 頁

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）ナシ

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）ナシ

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
奈良女子大学学術情報リポジトリ
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace>
萬葉学会 <http://manyoug.jp/info>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村 和美 (OKUMURA, Kazumi)
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号:80329903

(2) 研究分担者

ナシ

(3) 連携研究者

ナシ